慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会学のなかのメルロ=ポンティ：ジョン・オニールの議論を超えて
Sub Title	Merleau-Ponty in sociology : beyond the discussion of John O'Neill
Author	清水, 淳志(Shimizu, Atsushi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.94- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 15 号（2010）

社会学のなかのメルロ＝ポンティ

―ジョン・オニールの議論を超えて―

Merleau-Ponty in Sociology―Beyond the Discussion of John O'Neill―

清水　淳志

１．はじめに

本稿の目的は、カナダの社会学者ジョン・オニール [1]の議論を再検討することを通してメルロ＝ポンティの社会理論の可能性を探っていくことにある。具体的には、オニールがメルロ＝ポンティの制度化概念をどのように取り扱っているかを見ていく。この概念は、メルロ＝ポンティの思想のなかで社会理論との接点としてよく取り上げられるものである。例えば、『メルロ＝ポンティと人間科学』（1970 年）[2]の訳者である久保秀幹によれば、オニールもこの概念からメルロ＝ポンティにアプローチしていると考えることが可能だという（O'Neill 1970＝1986 : 272）。本稿では、基本的に第５節の前半までオニールの議論をメルロ＝ポンティからの引用で補足しつつ考察していく。そして最終的に、第５節の後半では、オニールの議論をメルロ＝ポンティを使って乗り越える作業をしてみたいと思う。

以下、各節の概要を示しておきたい。まず、第２節では、オニールの身体の社会学を概観する。オニールの身体の社会学は、主に『語りあう身体』（1985 年）で展開されており、基本的に日本におけるオニール理解はここに留まっている。第３節では、ヴィーコをメルロ＝ポンティで補完するというオニールの構想を検討する。両者の補完関係は、オニールの 1974 年著作の表題にもなっている意味の共同産出（Making Sense Together）というアイデアに求められることになる。続いて第４節では、この意味の共同産出を、沈澱と探索というメルロ＝ポンティの制度化概念の特質から明らかにしていく。第５節では、メルロ＝ポンティのなかに社会批判の可能性を探ってみたい。ここでも、彼の制度化概念が検討の対象になる。オニールは、この社会批判の可能性を「制度化としての反省」に求めている。しかしながら、オニールの議論は、社会批判のために前提となるべき作業を欠いているため、不十分なものになってしまっている。そのため本稿では、制度化概念のなかで提示されてはいてもオニールが言及していない次元という概念に注目して、オニールの不備な点を乗り越える別の社会批判のあり方を考えてみたいと思う。最終節では、以上の議論をまとめたうえで今後の課題をいくつか提示しておくことにしたい。

２．身体の社会学

オニールは、マルクスの強い影響下で自らの研究を開始している。それは、『言語・身体・社

会』（1972 年）のなかに収録されたいくつかの論文から確認することができるが、同時にそのなかには、マルクスへの批判を見い出せるのも事実である。具体的にオニールの批判とは、「マルクスが一般的な疎外問題を経済的搾取という特殊な形態に縮小しようと試みた」（O'Neill 1972：121＝1984：158）ことにある。オニールにあって、こうしたマルクスの弱点を補うものとして、メルロ＝ポンティの現象学が登場することになる。

> 「私の思索は、マルクス主義と言語・身体化・相互主観性についての現象学的関心との混合である。そのさい主たる影響を与えたのはモーリス・メルロ＝ポンティとアルフレッド・シュッツであった。」（O'Neill 1972：xii-xiii＝1984：3）

上記の引用のなかにも「身体化」という言葉が見受けられるが、オニールの『語りあう身体』にあって、マルクスの疎外論と同様にメルロ＝ポンティの身体論は、大きな役割を果たしている。具体的にオニールは、メルロ＝ポンティの言う生きられた身体を「コミュニケーション的身体」（O'Neill 1985a：16＝1992：16）として提示する。このコミュニケーション的身体は、メルロ＝ポンティに関する限り以下の２つの意味を持つことになる。１つ目は、間身体性である。オニールによれば、これは「自分のうちだけではなく他人のうちにも感じることのでき、それゆえにコミュニケーションの基盤となる身体的現前」（O'Neill 1985a：16-17＝1992：16）のことだとされる。もう１つは、身体からの意味生成である。オニールは「（人間の身体の―引用者）直立姿勢と視聴覚的分節化とがひとつのシンボル世界」（O'Neill 1985a：17＝1992：18）を開くと指摘する。

オニールが強調したいのは、メルロ＝ポンティの言う生きられた身体が、現代社会において疎外され「商業的・教育的・医療的実践の従順な道具」（O'Neill 1985a：20＝1992：22）になってしまっていることである。この身体疎外の具体的事例については、『語りあう身体』の第３章以降で取り上げられることになる。オニールは、まずハーバーマスの『晩期資本主義における正統化の諸問題』（1973 年）を用いて、現代社会を①私生活主義（消費・出世の追求）と②公共生活の脱政治化（専門家支配）として特徴付けた（O'Neill 1985a：77＝1992：116-117）うえで、身体疎外を以下の３つのレベルで設定する（O'Neill 1985a：80＝1992：120-121）。

レベル	制度	言説
生命-身体	家族	健康／病気
生産的身体	仕事	セルフコントロール／搾取
リビドー的身体	個人生活	創造性／不満

上記の表に関して、オニールは「我々は、疎外を生産的身体のみならず、生命-身体、リビドー的身体にも影響を及ぼす複雑な現象として同定することができる」（O'Neill 1985a：81＝1992：122）と指摘する。この指摘からも分かるように、上記の３つのレベルは、経済的搾取のみに注目するマルクスの疎外論を修正し、経済以外の領域にも疎外を見い出すために考えら

れたものなのである。さらに付け加えれば、オニールはマルクスのみならずハーバーマスの枠組みの修正も考えている。

> 「今日でもなお、理想的言語活動共同体を合理的に正統化するというハーバーマスの計画を、３つのボディ・ポリティックの言説の特殊な語用論の枠内で拡張しようと目論むことは可能である。」（O'Neill 1985a：82＝1992：125）

オニールの意図は、３つの身体のレベルそれぞれに対応する制度と言説を設定したうえで、各レベルにおいて支配体制が行う諸政策の正当性を問うことにある（O'Neill 1985a：82＝1992：123-124）。そして、オニールにあっては最終的に「人間的家族の再建」（O'Neill 1985a：84＝1992：127）が、公共生活を強化するものとして主張されている。

ここまでオニールの身体の社会学を概観してきた。『語りあう身体』（1985 年）の刊行は、身体の社会学の嚆矢となった B・S・ターナーの『身体と文化』（1984 年）と１年違いであり、その意味でオニールの身体への着目の早さは特筆されて良い。また、オニールが言語的コミュニケーションを重視するハーバーマスの枠組みに身体という要素を付加したことも評価できる。なぜなら「生活世界は、言語能力と行為能力を用いる主体にのみ開かれているのである」（Habermas 1981＝1986：170）と主張するハーバーマスにあっては、我々の生活世界の身体的レベルが十分に捉えられているとは言い難いからである。ただ、本稿のテーマであるメルロ＝ポンティの社会理論に関して言えば、『語りあう身体』は極めて不十分なものと言わざるを得ない。以上で見てきたように、メルロ＝ポンティの身体論は、経済的疎外にのみ注目するマルクスの議論を修正するために導入されたものであった。しかしながら、具体的な身体疎外の問題が取り上げられる段階では、メルロ＝ポンティではなく「リビドー」（フロイト）、「商品の記号論」（ボードリヤール）、「生-権力」（フーコー）などが持ち出され、経済的搾取以外の疎外が論じられることになる。つまり、『語りあう身体』で展開される疎外論のなかで、メルロ＝ポンティは、生きられた身体の回復といった極めて一般的なかたちで取り上げられているだけなのである。これでは、従来からあるメルロ＝ポンティ像を一歩も出ていない。

考えてみるべきは、メルロ＝ポンティさらにはオニールが注目したこの身体という概念を、疎外論以外の文脈に置き直してみることである。先程オニールは、メルロ＝ポンティの言う生きられた身体の特質として、間身体性と意味生成をあげていたが、この２つの特質それ自体に疎外論が含意されているわけではない。このうち、後者の身体からの意味生成の問題は、次節で見る制度生成の文脈で重要な役割を果たすことになる。

３．ヴィーコの人間的制度

前節で概観した『語りあう身体』のなかで、メルロ＝ポンティと並んで、あるいはそれ以上

に取り上げられることになるのがヴィーコである。ただ、そこでは身体の話が中心となっているため、オニールが、ヴィーコのなかに身体と同時に制度という概念を見い出していることが分かりにくくなってしまっている。本節において何故このヴィーコの制度概念に言及するかと言えば、オニールが『コミュニケーション的身体』（1989 年）にあって、これとメルロ＝ポンティの制度化概念を以下のように結び付けているからである。

「メルロ＝ポンティの現象学は、フロイトとラカンほどの明確な関係をヴィーコとのあいだに有しているわけではない。しかし、制度化としての意識（mind as an institution）というメルロ＝ポンティの概念―それは、後にもっと詳しく見ることになるのだが―は、ヴィーコの人間的制度（human institution）の概念を補完するものだと言いうる。後者の人間的制度とは、最初は前人称としての人間の身体にありのままに基礎付けられており、後になってのみ合理的意識の自律性に支配されるようになったものである。」（O'Neill 1989：3-4）[3)]

上記の引用は、思想史上ともにデカルトを敵としたヴィーコとメルロ＝ポンティの関係を指摘するものとして非常に興味深いものであるが、残念ながらオニールは、これ以上両者の関係を説明することはない。この作業は、我々に残されたものとなっている。本節では、オニールの議論の範囲内で両者の関係を考えていくことを目的とし、そのための手がかりを上記の引用のなかにある身体―これは、前節から引き継いだ概念でもある―と制度に求めてみたい。

まず、オニールが考えるヴィーコから見ていこう。オニールが、ヴィーコを取り上げた著作として『意味をともに作り出すこと』（1974 年）がある。オニールは、このなかで自身が提唱する野生の社会学の先例としてヴィーコをあげ、「ヴィーコの野生の社会学」（O'Neill 1974：32）と名付けている。周知のように、ヴィーコの『新しい学』（1984 年）の定理は、以下のものである。

「市民社会としての世界は、確かに人間によって作られてきたのであり、したがってその諸原理は私達自身の人間意識の変容様態（the modifications of our own human mind）の内部に見い出すことができる。」（Vico 1984：96＝2007：186）[4)]

先の『コミュニケーション的身体』からの引用（O'Neill 1989：3-4）に出てきたヴィーコの「人間的制度」とは、ここで指摘されている人間によって作り出されたもののことである。オニールは、ヴィーコの以下の箇所を引用している。

「これは、人間的制度（human institutions）の順序である。すなわち、最初には森があり、次に小屋、それから村、続いて都市、最後に学院である。この公理は、語源学の一大

原理である。すなわち、人間的制度のこの系列にしたがって、その土地固有の語の歴史は語られなければならないのである。」（Vico 1984：78＝2007：153）

さらに、オニールは、ヴィーコが人類共通の習慣としてあげる宗教、婚姻、埋葬を「文明化された人間性の基礎的制度」（O'Neill 1983a：280）と呼ぶ。このような人間的制度のなかにあって、オニールはとりわけどのような制度に注目しているのであろうか。オニールは、『意味をともに作り出すこと』のなかで「ヴィーコの野生の社会学は自らの粗野な起源を取り集める」（O'Neill 1974：38）と指摘しているが、ここで言う「自らの粗野な起源」とは、「我々に共通の身体的起源」（O'Neill 1983b：122）のことである。そして、この身体的起源は人間的制度のなかでも強調されることになる。すなわち、オニールが注目するのは、身体に起源を持つ制度であり、『コミュニケーション的身体』からの引用（O'Neill 1989：3-4）で言えば、それは身体に基礎付けられた制度なのである。では、この身体に基礎付けられた制度とは、具体的に何であろうか。オニールは、ヴィーコの以下の箇所を引用している。

「人間の知性は、生来、感覚によって自らを外から身体として眺めるという傾向をもっており、反省を介して自己自身を理解するのには多大な困難がともないがちである。この公理は、すべての言語における語源学の普遍的原理を提供する。どの言語においても、語彙は、知性と精神に関わる制度（institutions）を表示するのにも、身体や身体の特性から採ってこられているのである。」（Vico 1984：78＝2007：152）

オニールが考える身体による基礎付けとは、上記のヴィーコからの引用にあるように身体や身体の特性から事物の語彙を選び取ること、すなわち「身体の隠喩」（O'Neill 1985a：40＝1992：53）によって事物を表現すること―それは「擬人化」（O'Neill 1985a：26＝1992：31）と名付けられることになる―が想定されている。そして、この擬人化されたものの具体的事例として、身体の隠喩に基づいて世界を１つの巨大な身体とみなす古代人の世界観（O'Neill 1985a：29＝1992：36-37）が指摘されており、これが、オニールの言う身体に基礎付けられた制度に該当すると言える。

以上がオニールが考えるヴィーコの「野生の社会学」である。このヴィーコの考え方は、メルロ=ポンティによってどのように補完されるのだろうか。例えば、上述した擬人化のようなものは、メルロ＝ポンティにあっては考えられていない。ヴィーコとメルロ=ポンティが同じ身体という言葉を使用していたとしても、その意味するところは様々だと言える。本節で注目してみたいのは、「擬人化」ではなく、先のヴィーコからの引用（Vico 1984：78＝2007：152）の前半部で指摘される反省に対する感覚の原初性である。これは、ヴィーコの別の箇所（Vico 1984：75＝2007：148）でも確認することができる。この反省に対する感覚の原初性は、メルロ＝ポンティの主張とも接点を持ちうるものだと言える。（メルロ＝ポンティの場合、感覚より

ももう少し限定された知覚に比重が置かれているが。）ただ注意すべきは、ヴィーコの『新しい学』にあってこの感覚の原初性は、単に人間学的特質としてだけ取り上げられているわけではないことである。これは、歴史的文脈でも、具体的には、人間が反省能力を持ち得なかった時代に感覚を通してのみ事物を認識していた（Vico 1984：116＝2008：20）という歴史的事実としても提示されている。

では、メルロ＝ポンティにあって、ヴィーコと同じように感覚や知覚を歴史のなかに位置付ける視点を見い出すことができるのだろうか。確かに、『知覚の現象学』（1945 年）などで知覚自体が問題とされる時、そこに歴史が介在してくることはない。しかし、メルロ＝ポンティが、芸術の問題を身体と結び付けて議論する時、知覚は大きな歴史のなかに位置付けられることになる。

> 「絵画と身体という２つの主題の間に単純な類比関係を立てることが問題なのではない。どんなに僅かの知覚であれ、知覚によって開始された身体の表現の働きが、絵画や芸術に拡大されるのである。絵画的意味の領野は、世界のなかに人間が出現したときから、開かれている。洞窟の壁に描かれた最初の描写が１つの伝統を始めえたのも、それが知覚の伝統という、もう１つの伝統を描き留めていたからである。芸術の準永遠性は、受肉せる存在の準永遠性と１つなのであって、我々は、芸術を始めるそのずっと以前に、我々の身体において、歴史という感知し難い身体の最初の経験をしているのである。」（Merleau-Ponty 1969：116-117＝1979：115-116）

上記の引用からメルロ=ポンティが、知覚から芸術の歴史的な生成を考えていこうとしているのが分かる。前節で触れた身体からの意味生成、より詳しく言えば「知覚のなかで開始されている世界の形態化」（Merleau-Ponty 1969：86＝1979：88）は、歴史的な場面にあっても想定されているのである。さらに、オニールも上記の箇所（Merleau-Ponty 1969：116-117＝1979：115-116）に続き、以下のように述べる。

> 「言語・思想・芸術の超越は、それらを事実上の超越物にしてしまうことで補いのつくものではない。超越は我々の仕事である。すなわち、ほかならぬ我々自身から干満を繰り返しては次々に押し寄せてくる意味の波のうえで、我々が、新たな感覚、新たな知覚を産出しながらたえず創始し共同で彫琢していく課題なのである。」（O'Neill 1973：xliii＝1986：160）

上記の引用にある「たえず創始し共同で彫琢していく」こと、これはオニールの 1974 年の著作にあっては、その表題となっている「意味をともに作り出すこと（making sense together）」と言い換えられている。オニールは、「世界の形態化」としての知覚を出発点にし

て、意味の共同産出を考えているのである。この共同産出というアイデア自体は、「精神のすべての産出作業は、応答であり、呼びかけであり、共同 - 産出（co-production）である」（Merleau-Ponty 1968：166＝1979：122）という指摘が見い出せるように、メルロ＝ポンティ自身のなかにも確認することができる。そして、この意味の共同産出というアイデアの導入こそ、オニールがヴィーコをメルロ＝ポンティで補完すると言った時、意図していたものなのではないだろうか。具体的には、ヴィーコのうちでは暗黙の前提、あるいは「共通感覚」（Vico 1984：63＝2007：123）といった言葉で片付けられていた人間的制度の生成を、オニールは意味の共同産出というメルロ＝ポンティのアイデアで補完しようと考えていたのではないだろうか。さらに言えば「意味をともに作り出すことの制度化（the institution of making sense together）」（O'Neill 1974：1）というかたちで、意味の共同産出と制度化概念の結び付きが見い出される時、本節の冒頭で見た『コミュニケーション的身体』からの引用（O'Neill 1989：3-4）のなかで、メルロ=ポンティの側に制度化という言葉が使用されている理由も分かってくる。

ヴィーコの人間的制度をメルロ=ポンティの制度化概念で補完すること、すなわち前者の生成を後者を使って考えていくこと。このことは、同時にメルロ=ポンティの制度化概念の重要な特徴を教えてくれている。具体的に言えば、『知覚の現象学』の序文にある「世界や歴史の意味をその生まれ出づる状態において捉えようとする」（Merleau-Ponty 1945：22＝1967：25）という意志のもとに、メルロ＝ポンティは、その制度化概念にあっても制度化というかたちで生成を考えようとしているのである。では、この生成という特質を持った制度化概念によって、意味の共同産出とは具体的にどのようなものとして理解できるのだろうか、次節ではこのことを考えてみたい。

４．沈澱と探索

意味をともに作り出していくことの制度化、本節では、これがいかなるものであるかを明らかにしていく。前節の冒頭で、オニールがメルロ＝ポンティの制度化概念を具体的に「制度化としての意識」（O'Neill 1989：3-4）として提示しているのを見た。この概念は『メルロ＝ポンティと人間科学』のなかにも見い出すことができる。オニールは、最初に意識は構成ではなく制度化として考えられるべきである、というかたちでメルロ＝ポンティの議論を紹介しており「制度化としての意識」という概念もここから導き出されている（O'Neill 1970：46＝1986：115）。オニールは、この概念を出発点にして言語や歴史の制度化を考察していくことになる[5]。ただ、以下では、そうした具体例よりもまずメルロ＝ポンティの制度化概念それ自体の特徴を明確にしておくことに努めたい。オニールは、メルロ=ポンティの制度化概念の説明として以下の箇所をあげている。

「ここで我々が制度化ということで考えているのは、ある経験にそれとの連関で一連の他

の諸経験が意味を持つようになり思考可能な一系列つまりは１つの歴史をかたちづくることになる、そうした持続的な諸次元を与えるような出来事―ないしは、私のうちに残存物とか残滓としてではなく、ある後続への呼びかけ、ある未来の希求としての１つの意味を沈澱させるような出来事―のことである。」（Merleau-Ponty 1968：61＝1979：44）

オニールは、上記のメルロ＝ポンティの制度化概念の基本的特徴として「沈澱と探索」[6]（O'Neill 1970：46＝1986：115）を指摘する。先に述べた意味の共同産出の制度化とは、意味が沈澱と探索のプロセスを繰り返していくことなのである。では、この沈澱と探索のプロセスとは、具体的にどのようなものなのだろうか。まず沈澱だが、これは普通、過去からの「残存物とか残滓」が滞留することを表わす言葉だと言える。確かにメルロ＝ポンティにあっても、過去からの持続や継承としてこの言葉が使用されているのだが、それに別の意味も付加されることになる。例えば、先にあげた制度化概念のなかの「ある後続への呼びかけ、ある未来の希求としての１つの意味を沈澱させる」という指摘を見てみよう。注目すべきは、メルロ＝ポンティが沈澱する意味のなかに見ている未来への志向性である。メルロ＝ポンティにあって沈澱とは、過去からのものであると同時に、未来へ向けてのものでもある。では、この沈澱という言葉に見られる、過去と未来の結び付きをどう考えれば良いのだろうか。

問題を解く鍵は、メルロ＝ポンティの過去理解の仕方に求めることができる。例えば、「過去が現在であった限りにおいて現在は過去へと拡散する」（Merleau-Ponty 1960：142＝1969：137）と指摘されるように、メルロ＝ポンティは過去をその時点における現在として理解している。より詳しく言えば、過去とはその時点において「未来に向けられた現在」（Merleau-Ponty 1969：34＝1979：42）なのである。つまり、メルロ＝ポンティにあっては、過去それ自体が、未来への志向性を含んだものとして理解されている。メルロ＝ポンティが考える沈澱とは、未来への志向性を含んだ過去の沈澱なのである。

次に、もう一方の探索はどのようなものであろうか。我々は、過去から現在、そして未来へと何事かを受け継いでいく。しかし、当然のことながら、過去から受け継いだものが、そのまま未来となるわけではない。継承の過程で我々は事物を作り変えることができる。この作り変えが、探索に相当する。ただ、注意してみるべきは、「超えながら継承し、破壊しながら保存し、変形しながら解釈する」（Merleau-Ponty 1969：95＝1979：96）というメルロ＝ポンティの指摘である。メルロ＝ポンティにあっては、継承と作り変え、すなわち沈澱と探索は、同時にあるいは同一の行為のなかで生じる。これが、具体的にどのようなことなのかを考えるために、もう１度沈澱に目を向けてみよう。上述したように沈澱とは、未来への志向性を含んだ過去の沈澱であった。考えてみるべきは、この未来への志向性の継承である。例えばオニールは、伝統の獲得を「過去において開かれていた問いかけを生き返らせ」（O'Neill 1970：52＝1986：122）ることであるとか、「過去のなかに開示されていた原初の予兆の回復」（O'Neill 1973：xxxix＝1986：154-155）であると述べている。これらの指摘にあって、継承されるべき未来への志

向性とは、過去において開かれていた「問いかけ」や「予兆」のことだと言える。言い換えれば、オニールが伝統の獲得として問題にしているのは、何か特定の事物ではなく、過去からの可能性の継承なのである。

では、この可能性の沈澱が、何故探索という作り変えをともなうのか。それは、可能性が具体的内容を持つものではないからである。我々は、可能性を所与のものによって捉えなおすことでしかそれを受け継ぐことができない。逆に言えば、過去の可能性を受け継ぐために、我々はそれを捉えなおし、作り変えねばならないのである。そして、この捉えなおされた可能性は、事実として我々に現前し新たに所与のものとなる。メルロ＝ポンティが沈澱とは「我々の現在への一切の現在の現前のことである」（Merleau-Ponty 1960 : 156＝1969 : 150）と言うのはこのことを指している。（ここで言われている「一切の現在」とは、上述したようにその時点における現在、すなわち過去のことを意味している。）オニールは、この捉えなおしと現前の過程を「所与のものと可能なものとの置換」（O'Neill 1970 : 61＝1986 : 131）としてとらえ、これをメルロ=ポンティの制度化概念の基礎にあるものだとしている。

以上で見てきたようにオニールは、意味の共同産出を沈澱と探索として、すなわち意味の過去からの継承と作り変えとして把握しようとしている。ただ、これだけでは、依然として漠然とした感は否めない。メルロ＝ポンティさらにオニールは、意味の共同産出として具体的にどのような事態を考えているのだろうか。前節でオニールは、意味の共同産出の一事例として芸術をあげていた（O'Neill 1973 : xliii＝1986 : 160）が、これは、さらに芸術の歴史性の問題として提示されることになる。具体的に言えば、オニールは、本節の最初で触れた「制度化としての意識」とそれに対立する「構成としての意識」をあげ、それぞれに生きた歴史性と死んだ歴史性を割り当てる（O'Neill 1970 : 54-55＝1986 : 124-125）。そして、この２つの歴史性の説明として芸術に関するメルロ=ポンティの以下の箇所が引用されることになる。

> 「美術館は、死の歴史性なのである。だが、美術館がその失格した似姿でしかないような、生きた歴史性がある。それは、自分が捉えなおしている伝統と自分が創始している伝統とをただ１つの動作で結び付けるときの、制作中の画家に住まっている歴史性であり、画家が彼の場所、彼の時代、祝福されたり呪いを浴びせかけられたりする彼の制作活動を離れることなしでも、彼を一挙に、この世で描かれたことのある一切のものに合流させる歴史性なのである。」（Merleau-Ponty 1969 : 103＝1979 : 103）

上記の引用のなかで沈澱と探索は、創始と捉えなおしという言葉で言い表されている[7)]。オニールによれば、生きた歴史性とは、画家の制作活動のなかで生じるスタイルの制度化の過程であり、これに対して美術館の展示（死の歴史性）は、この生きた歴史性から作品を切り離してしまうものだという（O'Neill 1970 : 54-55＝1986 : 124-125）。この絵画のスタイル―より具体的には制作手法―は、メルロ＝ポンティ自身による制度化概念の説明のなかでも１つの事

例として取り上げられている。そこでメルロ=ポンティは「画家はその先行者たちを模倣することによって別の描き方を学ぶ」（Merleau-Ponty 1968 : 63＝1979 : 45）と指摘する。画家は、先行者が持っていた可能性を引き継ぐためにそれを捉えなおし、新たな描き方を生み出すのである。この制作手法の継承と作り変えは、画家という主体を介して行われることになる。メルロ＝ポンティの制度化概念のなかで、未来への志向性を持った意味が「私のうちに」沈澱すると言われているのは、この主体の介在を示している。しかしながら、主体の存在を指摘したからと言って、美術品が１人の制作者の占有物になってしまうというのではない。メルロ＝ポンティが制作過程に見ているのは、あくまでも複数の主体間にあって制作手法の継承と作り変えが繰り返されていく共同産出のあり方なのである。オニールによれば、このような共同産出のなかで「美術家は、何が自分自身に由来し何が他者に由来するのかも、彼の応答を要求した問いに何が付け加えられ何が引き去られたのかも語ることができない」（O'Neill 1970 : 55＝1986 : 125）という。これは、メルロ=ポンティがフッサールから好んで引用する、伝統とは起源の忘却であるとの指摘を意味している（O'Neill 1970 : 55＝1986 : 125）。前節でメルロ＝ポンティ自身のなかに共同産出という考え方があることを確認した箇所（Merleau-Ponty 1968 : 166＝1979 : 122）もフッサール論のからのものである。

５．次元を与える

これまで見てきたメルロ=ポンティの制度化概念は、オニールの「現象学は批判的たりうるか」という論文（『言語・身体・社会』に収録）にあっては、社会批判のために利用されることになる。オニールは、この論文のなかで「現象学的哲学の課題とは、おのれの歴史的位置を確認すること、生活世界への負債を自認することである」（O'Neill 1972 : 228-229=1984 : 296）と主張する。『言語・身体・社会』の副題にある「再帰的社会学」という用語もこの主張から導き出されていると言える。ただ、オニールは、自らが所属する生活世界をその外側から理解しようとは考えない（「批判者は、おのれを共同体から疎外しない」（O'Neill 1972 : 234＝1984 : 304））。オニールが考えているのは、共同体の内部での「限定された反省」（O'Neill 1972 : 226＝1984 : 292）であり、それは「制度化としての反省」（O'Neill 1972 : 230＝1984 : 299）と言い換えられ、メルロ＝ポンティの制度化概念を使って以下のように説明されることになる。

> 「制度化の観念によるのであれば我々は、超越論的主観性に基づくのではなくて、むしろ、現前と共在の領野において与えられる反省の概念を提供できるであろう。この領野は反省と真理を沈澱と探索として位置付ける。我々は、反省を、時間性と状況のテクスト構造に結び付けられたものとして考えねばならない。」（O'Neill 1972 : 231＝1984 : 299）

オニールの言う「制度化としての反省」とは、上記の引用にあるように反省を「沈澱と探索」として理解することなのである。より具体的に言えば、それは、反省を状況付けられたもので

あると同時に、状況を捉えなおすものとして理解することだと言える。では、この「制度化としての反省」によって、オニールはどのような批判のあり方を考えているのだろうか。オニールは、自らの批判を共同体の伝統に基づくものだとする（O'Neill 1972：234＝1984：304）。ここで思い出しておきたいのは、可能性の沈澱と捉えなおしという前節の議論である。オニールの言う伝統の獲得とは、「過去に開示されていた原初の予兆」（O'Neill 1972：231＝1984：300）を回復することであり、それを捉えなおすことであった。そして、ここにこそオニールが考える批判の要点を見い出すことができる。オニールは、自らの批判を「事物が現にあるあり方とそれのありうる姿との差異を磨耗させる（exploit）ことなく、むしろ事物の逆転の経験へとおのれを開放する」（O'Neill 1972：235-236＝1984：306）ものだとする。ここで指摘されている事実的なものと可能的なものとの逆転とは、前節で見た「所与のものと可能なものとの置換」のことである。オニールは、現在において過去からの可能性を捉えなおし、新たに事実として現前させることのうちに、既存のものに対する批判を見ているのである。

以上が、オニールの議論である。ここでもう１度、オニールが言う「現象学的哲学の課題」に目を向けてみよう。それは、自らの歴史的・社会的立場性を認識することであった。オニール自身は、ここから自らが拠って立つ共同体を内部から批判するという上述した議論を展開していくわけだが、この過程で１つの視点が見失われることになったとは言えないだろうか。それは、自らの立場性をそれを取り巻く他者との関係のなかで相対化して認識しようとする視点である。あるいはより一般的に、それは個別の意味を全体的状況のなかで捉えようとする視点だと言える。オニールは、外部からの批判を否定するのに熱心なあまり、こうした視点を考慮に入れていない。そのため、オニールの議論では、共同体の内部で新たに事実として現前するものが、既存のものに対して何らかの批判的意味を持つと言い得たとしても、そのことと自らの共同体を認識することがどう結び付いて来るのかはっきりと見えてこない。やはり、自らの共同体を認識するためには、他の共同体との関係性を考慮に入れるべきではないだろうか。個別を全体的状況のなかで相対化すること、さらには個別と全体の関係性自体を問うていくこと、社会批判のためには、こうした作業こそ必要なものだと言える。ではメルロ＝ポンティの制度化概念は、こうした作業のためにいかなる示唆を与えてくれるのだろうか。以下、この点について考えてみたい。

議論は、前節で見たメルロ＝ポンティの制度化概念（Merleau-Ponty 1968：61＝1979：44）に再度注目してみることから始まる。これまでは、後半部にある沈澱という言葉に注目してきたが前半部から目を通していくならば、少し入り組んではいるが、制度化とは「持続的な諸次元を与えるような出来事」と定義されているのが分かる。以下では、このなかにある次元という概念に着目してメルロ＝ポンティの制度化概念を見ていくことにする。

この次元は、制度化概念のなかで「それとの連関で一連の他の諸経験が意味を持つように（傍点は引用者）」なるとされているように、一種の基準としての役割を果たすものである。このこ

とは、以下の箇所からも確認できる。

「世界のある諸要素が、それに従って今後残りの一切を測り、それとの関係で残りの一切を指示しうるような次元としての価値をもつに至るやいなや、スタイルが（したがってまた意味が）存在する。」（Merleau-Ponty 1969：85-86＝1979：87）

引用の後半部から分かるように、基準としての次元の成立によって、１つの意味が立ち上がってくることになる。制度化概念のなかで「思考可能な一系列つまりは１つの歴史をかたちづくる」とされているのは、この意味の立ち上がりを指している。では、次元の成立とともに立ち上がってくる意味とは、具体的にどのようなものであろうか。メルロ＝ポンティは、予め措定された意味が存在するとは考えない。メルロ＝ポンティにあっては、「つねに記号の布置が我々を、その布置に先立ってはどこにもありはしないような或る意味に導いてゆく」（Merleau-Ponty 1969：211＝1979：201）と指摘されているように、次元の成立にともなう意味とは、諸要素の布置関係から立ち上がってくるものなのである。

メルロ＝ポンティは、こうした次元を成り立たせる（「次元としての価値をもつ」）要素や経験の存在を指摘している。しかし注意すべきは、それらはあくまでも布置関係のなかで次元を成立させる働きをするのであって、それ自体は何か特別な存在だというわけではないことである。例えば、メルロ＝ポンティは以下のように主張する。

「まず、彼がカンヴァスないし紙の一点に置く色や木炭の斑点があり、次に、その斑点がおのれと共通な尺度をもたない全体に対して与える効果―斑点自身はほとんど何ものでもなく、それでも１つの肖像や風景を変えてしまうことは十分にできるのだから―があるのだ。」（Merleau-Ponty 1969：62＝1979：66）

上記の引用にあるように、全体を変えてしまう斑点自体は、ほとんど何ものでもなく、偶然の１つの点にすぎない。偶然にすぎないものが、それを取り巻く布置関係のなかで基準を生み出すこと、メルロ＝ポンティの言葉で言えば、次元の成立とは「偶然を理性に変え」（Merleau-Ponty 1969：49＝1979：55）ることなのである。

以上の議論をふまえて、もう１度メルロ＝ポンティの制度化概念（Merleau-Ponty 1968：61＝1979：44）に戻って考えてみたい。今まで見てきたように、次元の成立とは、諸経験のあいだの布置関係から「思考可能な一系列」として１つの意味が立ち上がってくることであった。そして、それは、成立した次元に基づいて個別の経験が各々意味付けられていく過程をも示していた。すなわち、メルロ＝ポンティの制度化概念にあっては、全体としての次元とそれを構成する諸経験（の意味）は、同時に成り立つものなのである。さらに、全体としての次元が、

諸経験のあいだの布置関係から成り立つものであることは、視点を替えて言えば、その布置関係が捉えなおされることにより、次元自体が変容する可能性があることを示している。この意味でメルロ＝ポンティが考える全体としての次元は、永久不変のものではなく「暫定的な均衡の法則（傍点はメルロ=ポンティ）」（Merleau-Ponty 1969 : 34＝1979 : 42）に従うものだと言える。

以上、次元という言葉に注目してメルロ＝ポンティの制度化概念を見てきた。この次元という概念を利用するならば、オニールの議論では視野の外にあった個別的経験を全体的状況のなかで相対化するという批判のための作業が可能になる。さらに、メルロ＝ポンティの言う全体としての次元は、個別と同時に成立するものであり、捉えなおされる可能性を持った暫定的なものであった。それゆえ、全体は、個別に対し常に圧倒的に優位であるというわけではない。このように、メルロ＝ポンティの制度化概念は、個別と全体の関係性自体を問い直す視点を我々に与えてくれるものなのである。

６．まとめ

以上、身体の社会学から始まって、「制度化としての反省」に至るまでオニールの社会学を追尾してきた。具体的には、第２節ではメルロ＝ポンティの身体概念を、第３節以降では制度化概念をそれぞれオニールが社会理論としてどのように受容しているかを見てきた。そして、第５節の後半にあっては、オニールにヒントを得つつも、メルロ＝ポンティの社会理論としてオニールの議論を超え出た地点に至ることになった。本稿を通してメルロ＝ポンティの社会理論の一端でも示すことができたのではないだろうか。

もちろん、まだ多くの課題が残されているのも事実である。ここでは、以下の２つを指摘して本稿を閉じたいと思う。１つ目は、メルロ＝ポンティの制度化概念をより統一的に把握することである。例えば、本稿では、制度化概念の要素として第４節で「沈澱と探索」、第 5 節で「次元」をそれぞれ取り上げてみたわけだが、この２つはどのように結び付くのだろうか。また、「持続する諸次元を与えるような出来事」と言ったとき、出来事と次元はどのような関係にあるのだろうか。これらの問いは、是非とも考えてみなければならない。もう１つは、メルロ＝ポンティの制度化概念と社会学が通常扱う制度とのつながりをどう考えるかである。これは、第３節の延長線上にある問いだと言えるが、本稿では、制度化という生成の側面を指摘するに留まらざるを得なかった。以上の２つを含め残された課題は多いが、今後もメルロ＝ポンティを社会理論として読む作業を進めていきたい。

注釈

1)オニールは、メルロ＝ポンティの『ヒューマニズムとテロル』『コレージュ・ド・フランス講義要録』『世界の散文』の英訳者である。さらに、いわゆる現象学的社会学に関するいくつかの論文も書いている

（O'Neill1980，1985b）。オニールの経歴については、奥田和彦 1985 を参照。先行研究としては、上田裕 1982，1983 と奥田和彦 1975 があげられる。前者は、主に身体の社会学を取り上げたものだが、残念ながら『語りあう身体』（1985 年）以前の論稿であり、資料的制約があると言わざるを得ない。後者の奥田和彦 1975 は、オニールの「現象学は批判的たりうるか」を解説しているが、数ある現象学者のうちの１人としてオニールを紹介しているため、内容的に踏み込んだものにはなっていない。

2)『メルロ＝ポンティと人間科学』は、原著（O'Neill 1970）を奥田和彦が増補したものである（O'Neill 1970＝1986：ⅱ-ⅲ）。増補された論文のうち、本稿で引用した“Language and the Voice of Philosophy,”in Maurice Merleau-Ponty,*The Prose of the World*,edited by Claude Lefort,translated by John O'Neill,Northwestern University Press,1973,pp.xxv-xlvi については、O'Neill1973：xliii＝1986：160 というかたちをとった。

3)オニールのヴィーコ理解は、多くをヴィーコの英訳（Vico 1984、ただしオニールが参照しているのは 1970 年版）に負っている。特に、institution の概念については注意が必要である。訳者の１人である M・H・フィッシュによれば、ヴィーコの『新しい学』は、事実上制度の学であるにもかかわらず、ヴィーコはイタリア語で制度を意味する言葉（istituzione）を一度しか使用していないという（Vico 1984：xix）。ヴィーコは多くの箇所で cosa という言葉（英語の thing にあたる）を使用する。フィッシュは、制度という言葉が当時持っていた合理主義理論からの負荷をヴィーコが回避しようとしたことにその理由を求めている。フィッシュによれば、現在その負荷はなくなってきているため、institution の訳語を当てたという（Vico 1984：xliv）。本稿のヴィーコからの引用は、英訳を参照して邦訳を改めたものを使用した。

4)オニールは、ヴィーコの『新しい学』を彼の『自叙伝』と関連付けて読むことを提唱している（O'Neill 1983b：117）。これは、ヴィーコの定理（Vico 1984：96＝2007：186）をヴィーコ自身に適用する試みだと言える。つまり、オニールは、ヴィーコが作り出したもの（『新しい学』）の理解を彼の意識様態（『自叙伝』）に求めているのである。

5)「制度化としての意識」は、メルロ=ポンティではなくオニールの概念であることに注意してほしい（第５節の「制度化としての反省」も同様）。なぜなら、メルロ=ポンティ自身は、制度化概念を意識哲学に対する治療薬として（Merleau-Ponty 1968：59＝1979：43）、すなわち意識の構成作用に替わるものとして持ち出してきているからである。オニールは、これを承知のうえで「制度化としての意識」という概念を提示している。彼の意図は、意識を時間性や言語との交換関係（O'Neill 1970：47-50＝1986：116-118）のなかで理解し、それをモデルにして制度化概念の解説を試みることにある。

6)このオニールが言う「沈澱と探索」は、メルロ=ポンティ自身のなかにどのように見い出せるのだろうか。まず、沈澱は、制度化概念の定義（Merleau-Ponty 1968：61＝1979：44）のなかに直接その言葉を発見できる。次に、探索については、この定義の少し前に、制度化されたものは捉えなおされうる（Merleau-Ponty 1968：61＝1979：44）との指摘があり、この捉えなおし（reprise）が探索にあたる。

7)本文中で指摘したように、メルロ＝ポンティは、過去からの可能性を捉えなおし、新たに事実として現前させることを沈澱と表現している。引用（Merleau-Ponty 1969：103＝1979：103）のなかに出てく

る創始が、沈澱の言い換えだと解釈できるのもここに理由がある。すなわちメルロ＝ポンティは、過去からの可能性を捉えなおし新たに事実として現前させることを、1 つの新しい伝統の創始だと考えているのである。例えば、メルロ＝ポンティには「沈澱、つまり後で気づきうるような意味の創設（Stiftung）の事実」（Merleau-Ponty 1969：53＝1979：63）という指摘が見受けられる。

※引用に関して邦訳のあるものはそれを参照したが、一部訳文・訳語を改めた箇所がある。

参照文献

Harbermas,J,1973,*Legitimationsproblem im Spatkapitalismus*,Suhrkamp Verlag,Frankfurt am Main（＝細谷貞雄訳『晩期資本主義における正統化の諸問題』1979 年，岩波書店）

————,1981,*Theorie des Kommunikativen Handelns,Bd,1,2 Suhrkamp*（＝河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論』上・1986 年，中・1987 年，下・1985 年，未来社）

Merleau-Ponty,1945,*Phénoménologie de la Perception*,Paris,Gallimard.（＝竹内芳郎他訳『知覚の現象学』1・1967 年，2・1974 年，みすず書房）

————,1960,*Signes*,Paris,Gallimard.（＝竹内芳郎他訳『シーニュ』1・1969 年，2・1970 年，みすず書房）

————,1968,*Résumés de cours,Collège de France 1952－1960*,Paris,Gallimard.（＝滝浦静雄・木田元訳『言語と自然　コレージュ・ド・フランス講義要録　1952－60』1979 年，みすず書房）

————,1969,*La prose du monde*,Texte établi et presente par Claude Lefort,Gallimard.（＝滝浦静雄・木田元訳『世界の散文』1979 年，みすず書房）

奥田和彦,1975,「アメリカ社会学の現在―北アメリカにおける現象学研究の現状」『現代思想』２月号,pp.190-203

————,1985,「J・オニールと社会学の世界」『言語・身体・社会』1985 年，新曜社，pp. i -viii

O'Neill,J,1970,*Perception,Expression and History;The Social Phenomenology of Maurice Merleau-Ponty*,Evanston:Northwestern University Press（＝奥田和彦編，宮武昭・久保秀幹訳『メルロ＝ポンティと人間科学』1986 年，新曜社）

————,1972,*Sociology as a Skin Trade ; Essays towards a Reflexive Sociology*,Heinemann（＝須田朗・宮武昭他訳『言語・身体・社会―社会的世界の現象学とマルクス主義―』1984 年，新曜社）

————,1974,*Making Sense Together ; An Introduction to Wild Sociology*,New York:Harper&Row

————,1980,"From Phenomenology to Ethnomethodology;Some Radical 'Misreadings'," in *Current Perspetives in Social Theory*,vol.1,edited by S.G.McNall and G.N.Howe,JAI Press,pp.7-20

————,1983,a "Naturalism in Vico and Marx:A Theory of the Body Politic," in *Vico and Marx*,edited by Giorgio Tagliacozzo,Humanities Press,pp.277-289

————,1983,b "Vico on the Natural Working of the Mind" in *Phenomenology and the Human Sciences,Supplement to Philosophical Topics*,vol.12,pp.117-125

————,1985,a *Five Bodies;The Human Shape of Modern Society*:Cornell University Press（＝須田朗訳『語りあう身体』，1992 年，紀伊国屋書店）

————,1985,b “Phenomenological Sociology,” *Canadian Review of Sociology and Anthropology*, vol. 22,no.5,December,pp.748-770

————,1989,*The Communicative Body;Studies in Communicative Philosophy Politics and Sociology*, Evanston,Northwestern University Press

上田裕，1982,「オニールの野生の社会学について―その社会的現実の構成を手がかりとして―」『佛教大学大学院紀要』第 10 号，pp.91-105

———，1983,「身体の社会学をめぐって」『社会学の現代的課題』法律文化社，pp.81-103

Vico,G,1984,*The New Science of Giambattista Vico*:trans from the 3d ed1744,by Thomas Goddard Bergin and Max Harold Fish,Cornell University Press.（＝上村忠男訳『新しい学』第 1 巻 2007 年，第 2・3 巻 2008 年，法政大学出版局）

（しみず　あつし　慶應義塾大学大学院社会学研究科）